

確認問題

1

P 47

- (1) 古今和歌集
 (2) (例) 日光
 (3) ひさかたの
 (4) ゆらり(ゆらりと)
 (5) C
 (6) D
 (7) A エ B ウ C ア D イ E オ

《解説》

- (1) 代表的な和歌集として、奈良時代の「万葉集」、平安時代の「古今和歌集」、鎌倉時代の「新古今和歌集」の三つを覚えておきましょう。
 (2) 日光を浴びてかがやくひまわりの様子が、「金の油を身にあびて」というたとえによって表現されています。
 (3) 「ひさかたの」は「光」に結びつく枕詞です。
 (4) 音をそのまま表す擬音語と、様子の感じをそれらしく表す擬態語とを区別できるようにしておきましょう。
 (5) Cの短歌は、「夕焼小焼」という体言(名詞)で終わっています。
 (6) Dの短歌の「白鳥はかなしからずや」は、「白鳥は悲しくないのだからか」という意味で、意味の上で、このあとに句点を付けることができます。
 (7) Aの短歌は、「しづ心なく花のちるらむ」の部分に擬人法が用いられています。Bの短歌は、「日のちひささよ」が、遠近法のような効果を上げて、ひまわりの大きさを感じさせています。Cの短歌は、夕焼けに照らされながら石崖に並ぶ子ども七人の様子が影絵のようにかがび上がってきます。Dの短歌は、周りの青に染まらない白鳥の姿からその孤独を感じ取ることができます。Eの短歌は、「二尺伸びたる薔薇」などの客観的な描写で対象を写生しています。

2

- (1) B
 垂乳根の
 (2) A エ B ウ
 (3) A エ B ウ
 (4) イ
 (5) ア
 (6) ウ

《解説》

- (1) Bの短歌の五句「たるみたれども」が、その前のことばと倒置の関係になっています。
 (2) 「垂乳根の」は「母」を修飾する枕詞です。
 (3) Aの短歌は、「氷らんとする湖」から冬の情景がえがかれているとわかります。Bの短歌は、「青蚊帳」から夏の情景がえがかれているとわかります。Aの俳句は、季語が「雪残る」で、季節は春。Iの俳句は、季語が「天の川」で、季節は秋。Uの俳句は、季語が「金亀虫」で、季節は夏。Eの俳句は、季語が「枯野」で、季節は冬。「天の川」は、現在の七月七日にある七夕との関連で夏の季語と考えがちですが、天の川が一年中で最も高い位置にかかるのは初秋の八月で、このころに最も明るく見えることから、初秋の季語とされています。
 (4) 「あたらしく冬きたりけり」は「新しく冬が来た」という意味で、この二句のあとで切れます。
 (5) I「サラダ記念日」は俄万智の歌集。U「若菜集」は島崎藤村の詩集。E「一握の砂」は石川啄木の歌集。
 (6) Dの短歌は、「その子は今二十歳となった。櫛を通すと流れるような黒髪にも、誇りあふれる青春を生きている美しさがよくあらわれているのだ」という歌意になります。